

## &lt;成木の発展 林業3&gt; 西川材の話 (江戸時代の頃)

西川材って聞いたことありますか？

私も飯能の祭りに行って初めて知りました。飯能まつりの際に、西川材の説明ブースがありました。薪割り体験や建具の展示などをしていました。飯能では西川材の知名度はアップしているようです。

多摩川・秋川の流域から産出した木材を「青梅材」、成木川・名栗川・高麗川(こまがわ)・越辺川(おっpegawa)流域から出荷した木材を「西川材」と言うそうです。江戸時代の頃から現代まで使われているようです。昔は川を使って材木を運んだため、川の名前が付いているそうです。

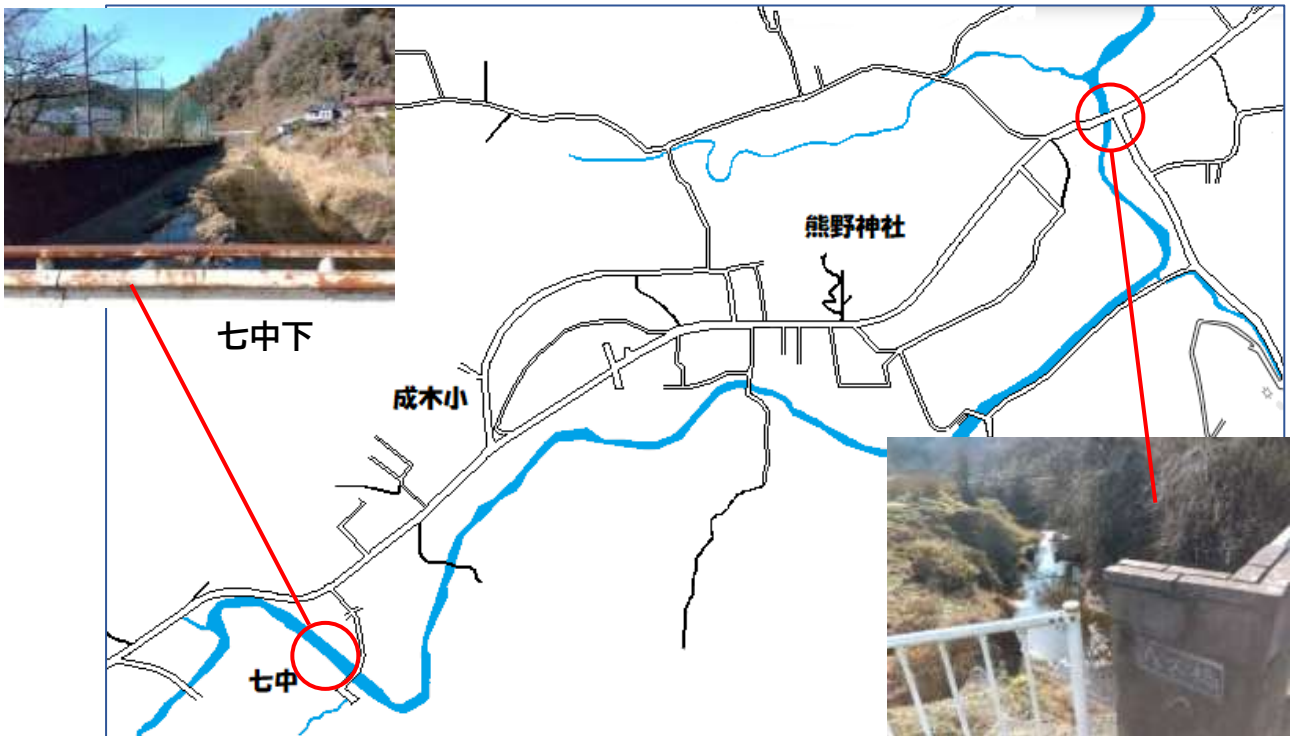
徳川氏が江戸に入ってから、江戸城の修築や市街地造成のために木材が必要でした。その後も人口増加や大火のため木材の需要が高かったようです。

成木から産出する木材は「西川材」と呼ばれ、成木川→名栗川→荒川と流れて運ばれていきましたが、多摩川で運ぶ「青梅材」の方が江戸までの距離が短く、早く到着するため利用しやすかったようです。

## 筏(いかだ)を作って運ぶ

木材は成木川の水流を利用して川越や江戸へ送られていましたが、その木材を集めて筏を組む河畔をドバ(土場)と呼ばれていました。成木川のドバは2か所あり、一つ目は七中の下、二つ目は二丁目丁字路の坂久橋の下でした。川を堰き止め、上流から運ばれてきた木材を15本ぐらいにまとめて筏にし、堰を壊した水の勢いで流すことで、江戸まで運びました。

橋の上から成木川を覗くと、筏が下っていく様子が目に浮かびます。



【出典】青梅市史 上巻 1995

青梅を歩く本1991

坂久橋下

【監修】若林 博司